

【知】自ら学び、考え、進んで行動する人

【徳】互いを尊重し、協力する人

【体】心身ともにたくましく健康な人

杉並区立中瀬中学校

下井草4-3-29 TEL 3399-2196

90%をどう考えるか

校長 香西 雅斗

科学と自然の散歩みちでは、サザンカの花が咲き始め、街角を冬薔薇（ふゆそうび）が彩る季節になりました。

さて、10月8日の体育大会では、フリーエントリーの個人種目に約75%の生徒が出場し、今年から始まった系のボランティアを合わせると約90%の生徒が、選手か係に参加しました。この90%という数字をどう考えるのかは、大事なポイントです。

例えば「ア：参加していない生徒が1割もいる。まだ不十分だ。」「イ：9割の生徒が自分から参加している。とても良い。」です。これをお読みのみなさんはいかがでしょう。

以前は「参加することは大切で意義がある。だから生徒全員が参加すべき」という理由で「ア」の様に捉える教員や大人が多かったと思います。しかしこれは、先生（大人）が「これが正しい。だから生徒（子供）もそうすべき。」という大人目線の論理です。

そもそも民主主義は、誰か（例：王様や賢人や先生）が正解をもっているのではなく、みんなで議論をしながらより良い方向に動いていくシステムです。だから反対意見があることが民主主義の健全さのバロメーターとも言われます。

ディストピア小説の金字塔である『素晴らしい新世界（1932年ハクスリー著）』は“不快な時に楽しい気分になれるソーマと呼ばれる薬が、全ての人に配給され、争いも悩みもなく、全ての人々が常に幸福を感じている社会”を描いています。

その中で、未開の地から来て、この世界に疑問をもち反抗するジョン青年が、世界統制官ムスタファ・モンドと議論する有名な一節（右）があります。

「要するにきみは」

とムスタファ・モンドは言った。

「不幸になる権利を要求しているわけだ」

「ああ、それでけっこう」

ジョンは挑むように言った。

「僕は不幸になる権利を要求しているんです」

…かっこよく言い切ったジョン。でもこの後、ムスタファは舌鋒鋭くジョンに迫り、たじろがせます…

その点で杉並区の教育ビジョン2020の『みんなのしあわせを創る杉並の教育』の『しあわせ』も、“誰かが決める” “誰かに与えてもらう”のではなく、まず一人一人自分で考え、迷い悩み、そのうえで周囲のみんなと議論しながら目指す『しあわせ』でなければなりません。

話が大きくなったので戻りますが、実は「イ」も違うと思います。10%の中にも、ラジオ体操や全員リレーや応援を頑張った生徒がいるように、90%の中にも「先生や先輩に言われたから」「周りが出るから」まずいと感じ、仕方なく出た生徒がいるかもしれないからです。だから、手を挙げた割合ではなく、生徒の“自分から考え覚悟する決断の質の高さ”が重要なのです。（あえて言えば、今回の90%は“ほど良い数字”という表現が妥当ではないでしょうか。）

ここで大切なのは「教員（大人）は生徒をただ見守ればいいのではない」ということです。私たち大人が、手を挙げていない子供に「もし迷っているなら、つらい方を選んでみたら」、挙げている子供に「自分でやると決めた分、得るものは多いよ」と声をかけ、そして何より、自分自身もそれを実践することこそ、先達としての私たち大人の役目だと思います。

『友翔～仲間と共にはばたけ～』 R3スローガン

素晴らしい体育大会でした。最後まであきらめずに競技に向かう姿勢、表情豊かにダンスを踊る姿、誠実に係の仕事に取り組む様子、気持ちを合わせて精一杯の応援を送る一体感。中でも3年生は、あらゆる場面で立派な姿を見せました。その思いを紹介します。



<50mを激走>

：二年の時、運動が苦手でも走っている人が、キラキラして見えた。三年になったら出ようと思っていたが、いざとなると「小学校の頃の様に、また恥をかくのでは」と、体がこわばってしまった。

でも「最後の体育大会だから出なよ。」と言われ、出場する決意が固まり、50mにエントリーした。

：体を支える手が、今にも折れそうなほど震えている。頭が真っ白になりスタート。結果は喜べる順位ではなかったけれど、走り切ったという達成感でいっぱいだった。

：その時は嫌でも、やり遂げた時に必ず達成感がある。挑戦しなければ、後悔が残る。3C 山田 悠翔

：私は徒競走を避けていた。一年は三人四脚、二年は個人種目に出なかった。怖かったからだ。

転んだら、大差を着けられたら：走るまでの、胸を締め付け、吐き気がする様な、不安を抱えた時間が嫌だった。

：50m走の直前、息苦しい緊張感の中に、妙な喜びがあった。この瞬間にしか味わえない感覚だ。

そしてゴール直後、驚いたことに私は笑顔になっていた。順位などどうでも良かった。ただただ楽しかった。私はこの楽しさや喜びを忘れていたのだと思った。3D 中尾 百花

：50m走で転んでも最後まで走る姿。全員リレーで運動が得意でも、不得意でもなんとかバトンをつなこうと必死に走る姿。それを見て「負けたらどうしよう」というプレッシャーは無くなり、最後まであきらめずに走り切れ、いいという気持ちに変わった。3B 松尾 翔

：一緒に50m走を走るメンバーは私より速い。だけど少しでも差を縮め様と全力で走った。：朝早くから運動することは減多に無いが、クラスを超えて学年の人と朝練習できて楽しかった。3B 長田 芽優



<対馬 慧：体育大会実行委員長>

：三年間の中で一番大変で一番楽しい体育大会実行委員だった。：学年種目を考え、曲を決め、全学年が盛り上げられるように応援を何回も練習しながら、全員リレーの走順を工夫し、クラスをまとめるなど、とても良い経験になった。

：「勝つことよりも大切なこと」を三年生になって見つけられた。勝ち負けよりも全員が全力でやることに意味があるのだとわかった。3B 有木 光里

：実行委員長、対馬君の「やらない後悔よりやって後悔」本当にその通りだ。：去年自分の目に映った、個人種目に出ていた先輩方の様に輝けたかな。3B 森 日乃花



：印象に残ったのは、みんな全力で応援し、満面の笑みだったことだ。3B 吉光 陽輝

：最高学年、最後の体育大会、全員リレー、学年種目、僕は「当日は休みたい」と思うほどプレッシャーを感じていた。

だが日を重なることに気付いていったことがある。それは実行委員長、対馬君(A組)の体育大会に対する気持ちだ。：みんなが落ち込んでいる中、彼だけはみんなを励まし「次はいける」他にも良い方法がある「あきらめず頑張ろう」と言っていた。

：悔いがないように全力で体育大会を終え、作文を書いているのは彼のおかげだと言っても過言ではない。彼の気持ちに僕を変えてくれた。3A 和久田 空

：僕はこれまで、応援は特に必要ないと思っていた。でも今年、何より自席からの応援が一番心に残っている。

：僕は100mに出て最下位だったが、そんな事はどうでもいらい応援に熱中できた。3C 齋藤 悠翔

：リレー選手になった人たちが一生懸命に走っていてとても感動した。そして、生徒席での応援はまとまりがあって、応援するのがとても気持ちよく楽しかった。3A 島村 智薫

：全員リレーがうまくいかず、テンションが下がりが気味の中でも実行委員は「次の2年全員リレーの応援をしようよ!」とクラス皆に声掛けしていた。：どのクラスからも応援の声がたくさん聞こえ。これからもこの声をときらせぬようにできるといいなと思う。3A 小田 朱理河

：後輩たち、保護者、先生が、私が思う以上に、三年生に期待してくれていて：「最後の体育大会」という実感が湧き全力が増した。

中瀬中の応援の力強さを改めて感じた。3B 菊池 理奈

：全員リレーやダンスだけでなく、他の学年を見ている人も、走っている人や応援している人が、皆輝いていた体育大会になった。3B 高江洲 サヤサブリヤ

：僕は、運動が得意・不得意に関係なく、中瀬にいる一人が楽しめる**体育大会**にしたいと思っていた。
：三年生らしいと思っていたことがある。一・二年生の全員リレーで、自分の色はもちろん、違う色の人が一生懸命走っている時、しっかり声を出し応援していた。：
3D 中村 海惺



＜実行委員の全校応援＞

：全校応援は、全校生徒で何かを一緒に行うのが新鮮だった。
：実行委員が中心となって盛り上げてくれて楽しかった。
3A 今井 文香

：全校応援の音楽がなり、歩き始めた。入場した時に見た景色は**今でも忘れられない**。全校生徒が揃い、会場全体が盛り上がりかっている。「体育大会ができて本当に良かった」と思った。そして何よりとても楽しかった。
3B 田中 俊也



＜水まき係のボランティア＞

：決勝審判はずっと忙しうだった。水まきや用具係も、懸命にやっついていて「**体育大会は多くの人が支え、その上で選手達が輝いている**」と学んだ。3B 池田 真衣

：大会直前まで包帯を巻いていて、走れないと思っていた人が、出場できた。「迷惑になるかも」と言っていたが、とても嬉しかった。
：さほど接点があったわけでもないが、走る事が好きなのは何となく察していた。だから全員リレーの後、思わずもらい泣きしそうになった。
：他にも、競技には参加できなかったが、一緒に係の仕事をした人もいた。**一緒に応援するだけでも楽しかった**。
：この体育大会は、コロナで人との関わりは制限されていた。でも、たくさんのおかげで成り立っていると、堂々と言える。3C 中野 睦月

：色別対抗リレーは、抜かしたり、追い抜いたりして、最後まで結果がわからず、見応えがあった。：
：個人種目には出なかったけど、その分ボランティアアや応援を精一杯頑張れた。
3A 宮下 莉緒

：練習やボランティアの仕事に積極的に取り組めた。
：そのため、種目をやり終えたときの達成感が大きかった。
3A 宮國 連久



＜学年種目前の円陣＞

：去年まで不安でしかなかった体育大会、今年は本気で挑んだから楽しいと感じることができた。**学年種目の前に組んだ円陣、皆がイキイキ**して見えた。：最後の集合写真で皆がマスク焼けしていることすらいい思い出になった。
3B 清嶋 心蘭



：男子はやる気がないと思っていた。でも足を痛めて見学した時、ダンスが嫌いな人はその人なりに頑張り、得意な人は皆を引っ張っていた。僕は頑張る決意をした。：
：本番、僕は全力で楽しみ、全力で踊って、全力で応援でき、とても嬉しかった。：3C 高橋 啓斗



：二年生が一年生に教えていた様に、お互いに教え合ってコミュニケーションを取っていくことが、ダンスの成功や、学年の一体感を生み、人に感動を与えるのだと実感できた。
：本番、とても緊張した。だが、三年生として、一・二年生に頑張る姿を見せたいという気持ちで、全力で踊った。3C 堀江 俊斗



：ダンスは、絆があったからこそ、三年全員で振り付けをそろえることができた、見てくれた人に**笑顔と感動を与えられた**。
：皆で最後の体育大会にふさわしい踊りをできたことを誇りに思う。3A 飛田 颯斗



：ダンスの選抜メンバーになって楽しいことより辛いことの方が何倍もあったが、その分学べたことがあった。
：私の目標にしていた「**ダンスの楽しさ**をみんなに伝える」ということも本番のダンスを見返すと、とても伝わってくる。：
：ダンスを通して私はすごく色々な面で成長できたと思っている。そんな風に成長させてくれた選抜メンバー！クラスメイトにはとても感謝している。
3D 小黒 めい

：この大会は物語の様だった。：前日の放課後、実行委員の女子は泣いていた。不安ややるせなさなど色々あったのだろう。：このままではだめだと思い、速さ的に考えて、色別を走ってほしい女子と三人で話し合い、走ってくれることになった。ただ、心から納得してくれたわけではなかった。：
C組は学年優勝した。接戦の中で決め手となったのが、最後まで悩み抜いた色別リレーだと知った時の、筆舌に尽くしがたいあの感情を、忘れることはないだろう。：
3C 久保 賢太

：憧れの先輩が選抜リレーを走り抜ける姿、自分の前の色別リレーの走者のたくさん悩みながら走り切った姿は、選抜リレーに出る私の背中を押してくれました。：
3C 古川 菜々美



<色別対抗リレー>

様々なドラマが生まれた体育大会でした。三年生の思いの紹介は次号以降ももう少し続きます。

標準服改訂にいたる経緯とこれからの予定

生徒会役員会の主催で行われた「これからの中瀬中にふさわしいのは制服か私服か」をテーマとしたグループワークを経て、中瀬中学校は新校舎完成に向け、標準服を改訂することになりました。以下に、これまでの経緯とこれからの予定を載せます。

令和2年度	生徒会による『中瀬中生の理想の生徒像』作成
令和3年8月	生徒会が、生徒から新校舎に向けての、制服・私服についての意見を収集
9月	学校だよりにて生徒の意見と見通しを周知
10月	異学年グループで、生徒が「制服・私服」ディスカッション。結果を学校だより（10月号2）で周知。
11月	『生徒の意見の傾向を踏まえ標準服の改訂を進めることを、CSとPTA運営委員会に報告・承認』

11月29日(月)～12月4日(土)

学校公開週間に合わせ、縫製業者6社が、昨今の一般的な標準服を展示

- ① **生徒と来校者に、新標準服についての要望アンケート実施**
標準服縫製業者へ新標準服についての要望を伝える



令和4年3月5日(土) 13:00～15:00

体育館に縫製業者6社が要望を盛り込んだモデル(各社3セット)を展示

- ② **1社10分程度のプレゼンテーション。それを受けて、近隣小学校の1～5年生の保護者の投票により3セット選ぶ(一次選考)**



4月下旬 生徒全員で、3セットから、中瀬中にふさわしい標準服を選ぶ(二次選考)⇒ 縫製業者決定

5～7月 何回か作り直しを経て、標準服デザイン決定

9月 新入生保護者説明会で新標準服お披露目

現在の小学5年生が、中学3年になった時の卒業式は、完成した新校舎の体育館で行う予定です。その時に、全学年が揃って、新しい標準服で参加することになります。